

人生は対応のバリエーション										
			←				宮井 研治			

### 第13話 心理士、保育現場にお邪魔します～保育士さんとのコンサルテーションを通して～

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

大学の人として仕事をするようになって10年になります。いくら時の流れが早くなったと言っても、10年は一区切りでしょう。自分の特性として、一度始めるとなかなか止めないという所があるようです。これは、継続力があるというより、自分でスパッと止める能動性が乏しいといった方がぴったりくると思います。努力、精神力或いは、忍耐力といったものに長けて、続けることができる、こうした面が全くないわけではありません。しかし、私の特性は、ついダラダラと続ける能力だということだと思います。例になるかどうか分かりませんが、勤める会社が存在する限りは、少々難があっても、辞めない、辞められない。さっさと辞めて、より自分に合った会社を探すことは苦手。会社が倒産、統合されてなくなってしまうか、会社の方からリストラされるまでは、辞めない、辞められない。やはり、才能というより、特性というか癖の類いでしょう。長くなりましたが、卑下しているばかりではありません。今回から、しばらく、そんな特性

も相まって続けてきた仕事について書こうと思います。仕事と言っても、生業は「大学教員」であります。人に「あなたのお仕事は？」と問われたら「大学で教員しています」と答えるでしょう。大学の先生と言っても、ピンキリなのは言うまでもありません。しかしながら現在のお仕事は、私の立場からすれば、本当に有難い限りです。自分のプラットフォームを持てることの有り難さは、前職の公務員を辞してからふつつつと日を追うごとに感じてきたことです。しかし、今回取り上げるのは、生業である「大学教員」としての仕事ではありません。そこをプラットフォームとし、心理士として臨床活動をしている現場について書きたいと思います。我々、臨床心理学のカテゴリーにいる大学教員は、大学以外でも自分の研究活動をする現場を持つことを推奨されています。そのために研究日がいただけているのです。その研究活動の現場である保育園でのコンサルテーションについてお話したいと思います。

## 1. 保育園にお邪魔してみること

大学教員以前の公務員時代で、最も長く所属したのは、児童相談所でした。児相の話は、割りといろんなところで書き散らかしているし、私の原点だと思っています。児相時代も保育園との関わりは常にありました。これは、児童虐待絡みであり、連携せざるを得ない状況が常にあったからです。夜中に「隣の家で子どもが泣いている、なんか大人の怒鳴り声もする」なんていう通告が入ると、基本出勤せざるを得ないのが今の児相です。もちろん、夜中にいきなりドンドンなんてドアを叩かないといけないような切迫した事案より、行ってみたけどもうみんな寝静まっていてというのが遥かに多かったように感じます(虐待の嵐が吹き荒ぶ児相時代終盤には、仮にも管理職の方だったので、出勤するより、出勤を要請する立場でした。逆にそれが1番のストレスでした)。翌日、たぶん該当するであろう子どもさんの通う保育園に、電話を入れて調査するというパターンです。だから、保育園さんとの思い出は楽しくて楽しくて、なんてのはないです。

ということで、まさか公務員を辞し、その後自分の臨床現場として、保育園および認定こども園にお邪魔することになるとは、まさに表題通り、「人生は対応のバリエーション」に満ちております。そこで、この10年あまり、心理士として保育現場に関わってきた経験から考えたことを書こうと思います。題して「心理士、保育現場にお邪魔します～保育士さんとのコンサルテーションを通して～」シリーズでお伝えしようと考えています。今回は、その1回目となります。

## 2. 保育現場はたいへんだ！

保育現場でたいへんだと、保育士さんらが考えていること、この話から入ろうと思います。最初に断っておきます。よくあるような、京都市内及び滋賀県草津市の一部の保育園へのアンケート調査を基にはじき出された驚きの結果です、ジャカジャ〜ン、てなもんでありません。限られた地域の保育園および認定こども園にお邪魔して、通園されている子どもたちに関するコンサルテーションを、専門職である保育士の先生と行った結果でてきた所感についてお話ししていきたいということです。エビデンスがあるっちゃあるし、ないっちゃない話です。ですが、一心理士として、現場で働く保育士さんには大きく納得してもらえるものではないかと思います。更には、今後の保育に役立つものが一部であれば、うれしい限りです。

いろんな園の異なる年齢のクラスを担当している保育士の先生方から、いろんな話を聴いてきました。主には、抱えている子どもたちへの関わり方への困り事です。また、子どもの保護者との関わりについての困り事です。困り事は、その園の規模や古いのか新しい方なのか、地域性(例えば、住宅街のど真ん中にあたり、街中から外れた田園地帯にあるなどの違い)、その保育士さんの経験年数による差異などはあります。でも、集約すると、

- ①対象となる子どもの発達特性に絡むこと
- ②不適切な養育に関すること

以上の二点に、集約されるように感じました。①については、更に「今、この子にど

のように関わればよいのか？」「この先、どうやって保育していけばよいのか？」「園と保護者との捉え方のズレ」の3つのフェーズに分かれる感じです。②については、「果たして虐待なのかどうかの情報が乏しい」「支援の必要な家庭だが、そもそもどう関係をつけていけばよいのか」「園の心配をどう伝えたものか」などなど。真面目な先生ほど悩みは深い。

### 3. 心理士として、私ができること

最初に保育園のコンサルテーションの話がきた時は、“それは、私のお仕事じゃないでしょ”、“保育現場で働いたこともないのに、何が言える”とかなり尻込みぎみでした。根がけっこう真面目なもので(笑)。しかしながらよく考えてみますと、私のキャリアの最初は、知的な遅れのある就学前の子どもたちの通園施設だったではありませんか！療育機関ではありますが、まさに形態は幼稚園。みんなスモックを着て、通園バスで通ってきて、朝のご挨拶から始まり、リトミック、プログラムを組んだ各種取り組み、夏のプールに運動会、、、やってたやん！そう考えると、適任か！私を置いて誰がおる！かなり両極的振り幅を経て、コンサルの世界へ入ってきたわけです。

で、いろいろと試行錯誤しながら、草津市や京都市の保育園にお邪魔することが、なんやかやで10年目というところまで(草津市の方は終了しています)。そして、自明のことですが、私が保育園に分け入った最初の心理士ということではなく、この領域で仕事をする心理士はたくさんいます。保育園ではありませんが、キンダーカウンセラーをされている心理士もたくさんです。

先輩諸氏の助言も受けながら、自分なりのカラーも出さねばと模索を重ねてきました。ただ、自分らしくあればそれでよしというだけのコンサルは絶対イヤ、現場の保育に少しは役に立てるであろうというラインを目指しました(実際、お役に立てているかのエビデンスはありませんが、クレーム、次回交替希望の連絡を受けた事実はありません、たぶん)

では、具体的な工夫はなにによ？と問われれば、保育士さんの困りを聞いていくときに、心配事・問題点だけではなく、対象となる子どもさんの安心な面とといいますか、長所やちょっとマシな側面もセットで聞いていくようにしています。種明かしをしますと、私の面接法の中でもたびたび出てくる「解決志向」をベースにした、「サインズ・オブ・セイフティーアプローチ」というアセスメント法から引っ張ってきたやり方です。元々は虐待ケースに特化して作られた経緯があります。「問題・心配」と「安心・つよみ」を同時進行で探していくというアプローチで、保育園でのコンサルテーションに私が応用させてもらいました。

まず手順としては、心配事・問題点に対して、すでに保育士さんがやっている対応を必ず聞くようにしています。それなりに経験だけはありますから、すぐに回答じみたことを伝えたくありませんが、うまく受け取ってもらえないことが多いです。「それはすでにやってみたんですが」とか、「ちょっとこの子には合わない気がします」と早々に却下されることが起こります。まずは、保育士さんの対応を尋ねた後、こちらのカードを切るわけです。実際、心配事・問題点だと言いながら、何とかご自身の対応で切り抜

けている場合がけっこうあります。そういうもんです。うまくいってない場合に、後出しジャンケンのように、そっところの対応のアイデアを出すと、ことのほか受け取って貰えたりします。不思議なものです。実際に後出しジャンケンで受け取ってもらえた対応のいくつかは次回ご紹介したいと思います。

#### 4. それにしても、子どもたちは面白い

実は、この保育園のコンサルシリーズで1番話したかったのは、子どもたちの笑える姿です。人は、子どもの無垢な姿に惹きつけられるものです。当の本人らに笑わせたろといった計算がないことが前提ですが、それができるのが、即ち子どもだからと言えます。なんかどこぞの大臣の変な話法みたいになってきたので説明はこの辺でやめます。

子どもの発達とはよくできたもので、年齢の違うクラスでは、不意の訪問者(私のことですが)に対する反応が大きく違います。だいたい、2歳児クラスのお友達は、見慣れない私が保育室にお邪魔すると、一斉にがん見します。その後、積極的な子から順に寄ってきて、私への質問ではなく、自分のことを好き勝手にしゃべっては帰っていく感じ。「犬飼ってる」「猫おる」「しっこでた」ご自身のことをコメントするのがコミュニケーションの仕方になっている感じと言いましょうか。自己中心性の為せる業かと思えます。3歳児クラスになると、やっと私のことを問いただす姿勢がでてきます。「だれえ〜?」「パパ?」最近は「ジイジ?」か「園長?」でしょうか?自分の物差しで、私の社会的役割を特定しようとしてきます。

ある時、5歳児さんのクラスにお邪魔した時のこと。5歳児ともなると、私の方から目線は投げかけますが、また保育士の先生の方へと修正します。これは、先生が慌てないところから、私がお客さんであることの推測、おっつけ先生から説明があるであろうことをわかっている態度と言えるかもしれません。でも知りたい子もいるんですよ。先生のお話を聴いていた集団の最後尾の列の子どもが、我慢できない感じで寄ってきて、私に顔を近づけ、「おっちゃん、不審者?不審者?」と尋ねてきました。しかも小声で。先生は聴かれていたようで、慌てて私に謝ってこられました。でも、これって「人を見たら不審者と思え」という一つの学習が成立した結果だと言えますし、私はといえばやや焦りながら「そう思っちゃうよね!」と彼を弁護した次第です。今思えば「不審者に不審者って聞くんか〜い!」と返してあげるのが正解だったかなと、今でも悔やんでいます。

今回はここまで。